

特別の教科 道徳（道徳科）

道徳科においては、それぞれの授業における指導のねらいとの関わりにおいて、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の生徒の成長を促すとともに、それによって自らの指導を評価し、改善に努めることが大切です。

◆ 道徳科における指導と評価の一体化

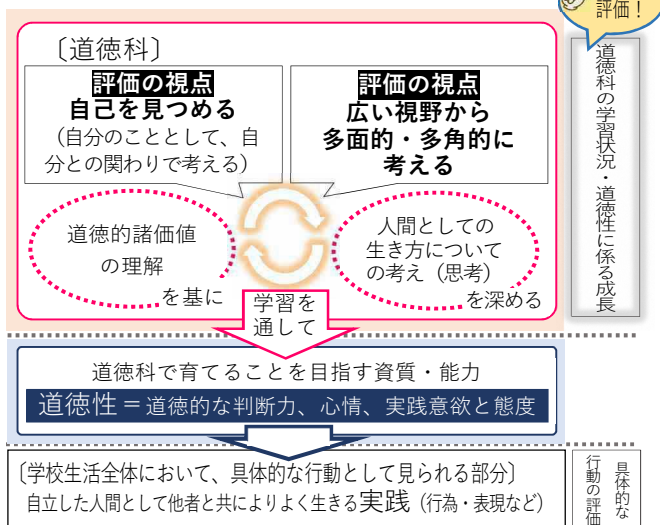
道徳科の評価には、「生徒の学習状況を見取る評価」と「教師の授業に対する評価」があります。

① 生徒の学習状況を見取る評価

生徒が自らの成長を実感し、更に意欲的に取り組もうとするきっかけとなるような評価を目指すことが大切です。

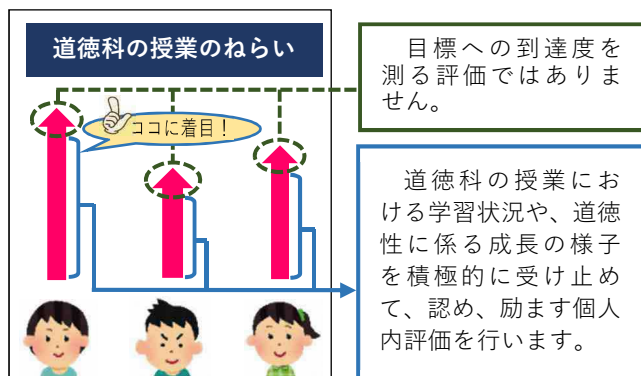
生徒の評価においては、内面的資質である道徳性が養われたか否かは、容易に判断できるものではありません。道徳性を養うことを学習活動として行う道徳科の指導では、その学習状況や成長の様子を適切に把握し評価することが求められます。

【道徳科の学習活動と評価のイメージ】



また、道徳科の評価は、他の生徒との比較による評価ではなく、生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価として記述式で行います。

【道徳科における個人内評価のイメージ】



道徳科の評価に当たっては、次の2つの視点を重視することが重要です。

視点1 一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか

よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うためには、生徒が多様な感じ方や考え方に接し、多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えることが大切です。

【多面的・多角的な見方へ発展している生徒の姿の例】

- ・道徳的価値の様々な面や支える根拠を考えている
- ・様々な立場に立って考えている
- ・焦点を絞ったり、視野を広げたりして考えている
- ・時間の経過とともに変化する気持ちを考えている
- ・人間の強さや弱さ等を捉えて考えている

視点2 道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているか

道徳科では、生徒が、登場人物の立場に立って自分との関わりで道徳的価値について理解したり、そのことを基にして自己を見つめたりすることが大切です。

【道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めている生徒の姿の例】

- ・登場人物に共感している
- ・教材の問題点等を自分事として受け止めて考えている
- ・日常生活や学校生活等を想起して考えている
- ・自分の生活を振り返って考えている
- ・自分だったらどのようにするか考えている

② 教師の授業に対する評価

教師自らの指導を評価し、その評価を授業の中で更なる指導に生かすことが、道徳性を養う指導の改善につながります。

明確な意図をもって指導の計画を立て、授業の中で予想される具体的な生徒の学習状況を想定し、授業の振り返りの観点を立てることが重要です。こうした観点をもつことで、指導と評価の一体化が実現することになります。

【教師が自らの授業を振り返る評価の観点の例】

- ・道徳科の目標に基づき、道徳科の特質を生かした学習指導過程が構成されていたか
- ・指導の意図に基づいて発問されていたか
- ・生徒の発言に傾聴し、反応を指導に生かしていたか
- ・教材・教具の活用は適切であったか
- ・指導方法は、生徒の実態や発達の段階を踏まえていたか
- ・配慮を要する生徒に適切に対応していたか

◆ 学習評価に関する事例

【POINT】

・ 道徳科における指導と評価の一体化を図り、質の高い授業を実現するためには、

・ 一貫した「指導の明確な意図」をもつこと

・ 道徳科の目標に基づいた学習指導過程を構成することが大切です。



【POINT】

指導の明確な意図

・ 道徳科の授業づくりに当たっては、授業構想の筋道である

- ① 授業者の意図
- ② 生徒の実態
- ③ 教材の活用

について、一貫した指導の明確な意図をもつことが大切です。

【①授業者の意図】

教師が、ねらいとする道徳的価値について、どのような指導が必要だと考えているかを明らかにします。



【②生徒の実態】

ねらいとする道徳的価値について、日常の道徳教育でどのように指導し、その結果、生徒にどのようなよさや課題が見られるかを明らかにし、本時で特に考えを深めさせたいことを明確にします。



【③教材の活用】

授業者の意図、生徒の実態を基に、発問の仕方など教材の活用の仕方を明らかにします。



【中学校第3学年】

1 主題名

「内なる自分に恥じない気高い生き方」〔D よりよく生きる喜び〕

2 教材

二人の弟子（「私たちの道徳 中学校」文部科学省）

3 主題設定の理由〔指導観〕

(1) ねらいとする道徳的価値〔価値観〕

人間は、決して完全なものではない。誰の心の中にも弱さや醜さがある。しかし、同時に、人間はその弱さや醜さを克服したいと願う心をもっている。時として誘惑に負け、易きに流れることもあるが、苦しみに打ち勝つことによって、人間として生きる喜びに気付くことができる。そして、人間として生きる喜びや人間の行為の美しさに気付いたとき、人間は強く、気高い存在になり得ると考える。

第3学年の時期の生徒は、中学校での様々な人との関わりの中で劣等感を感じたり、妬んだりする経験やそれらの感情に向き合い、克服する経験を通して、人は誰でも人間らしいよさをもっていることを認められるようになるとともに、誰に対しても人間としてのよさを見出していこうとする態度が育ってきている。

指導に当たっては、自分の心の内にある劣等感や傲慢さに改めて気付かせるとともに、人間がもつ強さや気高さについて十分に理解させ、生徒が自ら、自分の弱さを強さに、醜さを気高さに変えていこうとする態度を育てていきたい。

(2) 生徒の実態〔生徒観〕

生徒が自ら、自分の弱さを強さに、醜さを気高さに変えていこうとする態度を育てるために、道徳科以外では、次のような指導を行ってきた。

①国語科「読むこと」

「読むこと」の教材「故郷」を扱う単元では、登場人物の弱さや苦悩を中心に読み深め、誰もがもつ人間としての弱さについて考える機会を設けた。

②総合的な学習の時間「社会人講話」

外部講師による、自分を奮い立たせることで目指す生き方を発見することができた体験についての講話の後、誇りある生き方について話し合う活動を位置付けた。

③日常の指導

学校生活の中で自他のよさを認め合う機会を意図的に確保し、生徒が互いにそれぞれがもつよさを見出していけるよう支援してきた。

これらの取組を通して、生徒は、誰もが弱さや醜さに加え、人間らしいよさをもっていることを認めながら生活しているが、自分と向き合うことは人間としてよりよく生きるための第一歩であると考えられることから、弱さや醜さを克服したいと思う心やそれらを強さや気高さに変えることの大切さについて、さらに考えを深め、よりよく生きる喜びを見出せるよう指導したい。

(3) 教材について〔教材観〕

①概要

本教材は、仏門で修行する二人の若者が対照的な生き方をしながらも、共に自分の弱さや醜さを克服し、人間として気高く生きようとする姿に触れることを通して、人間としての生き方について考えを深めることができる教材である。

②自分との関わりで、多面的・多角的に考えを深めるための工夫

まず、上人が道信を許したときの怒りを覚えた智行を自分事として自分との関わりで考えることができるよう、「自分が智行の状況に置かれたら、道信を許すことができるか」という視点で話し合い、人間理解を深めさせる。

中心的な発問では、自分の弱さや醜さに向き合い、人間として気高く生きようとするものの大切さについて、多面的・多角的に考えることができるよう、一輪の白ゆりを見て、あふれる涙を止めることができなかつた智行の気持ちを考え、価値理解や他者理解を深めさせる。そのために、反省以外の涙の意味や上人の言葉「自分自身と向き合って生きる」の意味に着目して話し合わせる。

4 ねらい

智行の涙の意味から、弱さや醜さと向き合い克服することについて考えることを通して、人間として生きることの喜びを見出そうとする態度を育てる。

5 学習指導過程

	<p>●学習活動</p> <p>○主な発問 (◎中心的な発問)</p> <p>・生徒の反応</p>	<p>・指導上の留意点</p> <p>■評価</p>
導入	<p>●智行と道信、上人の関係や自分像について整理する。</p> <p>○登場人物について整理しましょう。</p> <p>・智行：名家、才覚あり、修行に耐える。</p> <p>・道信：孤児、白拍子を思い、修行を逃げ出す。</p> <p>・二人の関係：励まし合い学問を続けてきた。</p>	<p>・朝読書で、教材の途中（智行が故郷に帰る回想）までを読ませておく。</p> <p>・人物像や人物関係を確認し、ねらいとする道徳的価値への方向付けをする。</p>
展開	<p>●教材「二人の弟子」を読んで話し合う。</p> <p>○上人が道信を許したとき、智行が怒りを覚えたのはなぜだろう。</p> <p>・自分は耐えてきた。今さら許せない。</p> <p>・逃げたことは許せないが、また修行をして変わりたいと思う気持ちは理解できる。</p> <p>◎一輪の白ゆりを見て、あふれる涙を止めることができなかった智行の「涙」の意味を考えて、話し合ってみましょう。</p> <p>・逃げ出した道信が許されて、悔しい。</p> <p>・感情的になった自分を後悔している。</p> <p>◎(本時のねらいに迫るための問い返し) 上人の言葉「人は皆、自分自身に向き合って生きていかねばならないのだ。」の意味も考えて、話し合ってみましょう。</p> <p>[人間の弱さ]</p> <p>・上人に分かってもらえなくて悲しい。(悲しみ)</p> <p>・白ゆりに比べ自分は汚くて情けない。(悔しさ)</p> <p>・上人の思いに気付かなかった。(恥ずかしさ)</p> <p>[人間の強さ]</p> <p>・上人の言葉の重さ、あたたかさに気付いて、よかった。ありがたい。(嬉しさ)</p> <p>・白ゆりが月の光のおかげで輝くように、自分も上人や道信らとの巡り合いによって、今ここにあるんだ。(感動)</p> <p>・自分も弱さを乗り越える強さを身に付けて生きていきたい。(よりよく生きる喜び)</p>	<p>・怒りを覚えた智行に共感し、立場を明確にして話し合い、人間理解を深めさせる。</p> <p>・智行が、一輪の白ゆりを見て、あふれる涙を止めることができなかったときに考えたことについて、多面的・多角的に話し合い、価値理解や他者理解を深めさせる。</p> <p>■「自分と向き合う」ことの意味を考える活動を通して、自分の弱さや醜さを克服し、よりよい生き方を探ろうとすることの大切さについて考えを深めることができたか。</p>
問い返し	<p>【POINT】 考えを深めさせる「発言の類型化」</p> <p>生徒の発言を板書する際には、様々な価値の側面や様々な立場から類型化して示すことにより、多面的・多角的な思考を促すことができます。</p>	<p>【POINT】</p> <p>ねらいに迫る「問い返し」</p> <p>多面的・多角的に考えさせるための「問い返し」を行い、生徒の発言を整理しながら指導に生かします。</p> <p>ココが重要！ 指導と評価の一体化</p>
終末	<p>●自分と向き合い、考えたことを交流する。</p> <p>○これまでの自分の生き方やこれから目指す生き方について触れながら、学習を通して感じたことや考えたことを書こう。</p>	<p>【POINT】 自己理解を促す過程</p> <p>・これまでの生き方を振り返った上で、目指す生き方考えることにより、自己理解を促します。</p>

【POINT】

道徳科の目標に基づいた学習指導過程

〔①道徳的諸価値についての理解〕
価値理解・人間理解・他者理解といった道徳的諸価値を理解するための発問を意図的・計画的に位置付けます。

〔②自己を見つめる〕
登場人物の置かれた状況に共感し、自分との関わりで考えを深められるようにします。

〔③物事を広い視野から多面的・多角的に考える〕
多様な価値観に触れ、自分の考えを深め、判断し、表現することができるようにします。

〔④人間としての生き方についての考えを深める〕
性急な変容を求めず、人間としての生き方について考えを深められるようにします。

【POINT】

評価における学習状況の整理

- ・評価に当たっては、学習指導過程等を工夫した上で、
- ①目標に基づいた学習活動
- ②具体的な学習状況
- ③評価できる点を整理して見取ります。

〔本時における評価の例〕

- ①(学習活動) 道徳的価値の大切さや人間の弱さについて話し合う活動を積み重ねる中で、
- ②(学習状況) 自分と異なる意見も尊重しながら、
- ③(評価できる点) 偏見や先入観にとらわれず、自分の生き方を見つめ直すことができるようになってきました。

【POINT】 道徳科の目標に基づいた授業を積み重ねる中で、大きくくりなまとまりを踏まえて評価

道徳科の学習状況の評価に当たっては、道徳科の学習活動に着目し、年間や学期といった一定の時間的なまとまりの中で、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を把握する必要があります。

学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握



〔評価の例：多面的・多角的な見方へと発展した生徒〕
自分と向き合うことについて考える授業で、教材の登場人物を自分に置き換えて考える活動を通して、「これからは自分の未熟さも他人の弱さも受けとめられる人になりたい」と考えを広げていました。

〔評価の例：自分との関わりで考えを深めていた生徒〕
教材の登場人物の置かれた状況に立って考える学習を積み重ねる中で、これまでの自分の生き方を振り返り、自らの行動や考え方を見直そうとする態度が見られるようになってきました。